

2022年4月27日 浅草岳（幻の）1585m 朝倉

家に帰ってから地形図を眺めていて—そういうことだったのか—と合点がいった。

昨夜来の雨は上がっていたが霧が立ち込めていた。高度を上げるにしたがってそれは濃くなっていくようだった。杉の森がいつしか山毛櫸の疎林に代わっていたが黒いシルエットとなってぼんやりとにじんでいた。時々思い出したように現れる赤いテープを確かめながら雪原の尾根の登高を続けていった。

辺りを覆った霧が身を濡らすので雨具をつけた。登っている尾根はわかりやすい地形をしていた。いつ引き返してもいいつもりでいた。苦しくもあった。しかしこれまで積み上げてきた距離と高度を思うとなかなか引き返せなかった。

一部雪の消えた登山道が現れ水の半分ほど入ったワンカップの置かれた三角点があった。地形図にある1484.7mの三角点と思われた。登山道はすぐに再び雪の下に消え、雪面を更に進むとブッシュの塊の中にまた登山道が現れた。それをたどるとある地点からどんどん下って行った。南方向、北岳方面への登山道なのだろう。

再び前岳であろうピークに戻ってほかの登山道を探すがわからない。緩やかな登り傾斜の両側が低まっている雪稜の中央部を外さないように慎重に歩を進めていった。やがて黒いシルエットが望まれた。あれが山頂だろうと思った。寄ってみるとブッシュの塊があるだけで山頂を示すいかなる形跡も見いだせなかった。周囲をうかがっても、もちろんホワイトアウトで10m以上は皆目わからないような状態だったのだが他にこれ以上の高みはわからなかった。これ以上周囲をうろついているうちに滑落する危険も考え下山することに決めた。

微かに分かる自分の足跡を忠実に確実に拾っていく。前岳と思われるピーク、1484.7mと思われる三角点を過ぎ後は登ってきた尾根を外さないように下っていただけだった。左右の木々のシルエットが必ず自分より低い位置にあることを心がけて快調に下って行った。自信があったにもかかわらず気が付くと両側の木立は自分より高い位置にそのシルエットを見せていた。沢筋に見事に入り込んでいたのだった。

考えてみる。尾根を左右どちらに外したのか、それはわからない。どちらの尾根に上るべきか、どちらも上部は霧の中に隠れて高さがわからない。悪魔がささやいた。下山するにはどっちみち高度を下げなければならない。下りよさそうな樋状の沢だった。障害物もない。落石、雪崩の心配もなさそうだった。セオリーに反し沢筋をどんどん下って行った。かなりうまく下っていったが、高度をだいぶ下げたころやはり滝に行く手を阻まれた。

覚悟していたので右か左かの問題だったがここでも安直に低そうな右の尾根を選んだ。上部でユキツバキのブッシュに苦労させられたが尾根に出ると雪面が広がり、高度を下げたためか霧も薄れ下方の様子がわかるようになってきた。急な雪面を下っていくと沢の狭まりに行く手を再び阻まれた。

ここでも左右の二者択一。左は崩壊したような地形で逃げられそうもない。右の尾根に

活路を求める。雪田の上はまたユキツバキのブッシュで思ったより厚く先ほどの比ではなく悪戦苦闘をすることになった。両手のストックのリングが枝に、ザックにつけたピッケルの先が枝にやはり待ったをかけられるのだった。林床には可憐なイワウチワが花開いているのだが愛でる余裕など全くない。へとへとになってようやく尾根に出て驚いた。そこには雪の解けた登山道が下っていたのだった。地図に記載のない登山道の出現に安堵させられた。

雪面に比べればはるかに歩きにくい土の道だが慈しむ様に下って行った。やがてその道も傾斜が緩くなってくると雪の下に消えていった。そのまま下っていくと比較的大きな沢に出くわした。この面を降りている沢は駐車した横を流れていた大きな川に注いでいるはずだから左へ左へと上り下りを繰り返しながらトラバースして行くと朝登ってきた見覚えのある登路に出ることができた。

地形図を見ていて分かったこと 参照：国土地理院 25000分の1 守門岳

根本的な最大の間違ひは、五味沢から入山した私は地形図の破線の徒歩道を登っていることを最後まで少しも疑わなかったことだ。実際はこの登山道と交差していた実線の軽車道の伸びていた尾根を登っていたのだった（一つ右隣の尾根）。ただ全て雪下のこと、もちろん道標などあるはずもなく導かれるままに登った結果である。この尾根は 1484.7m三角点すぐ手前で破線の登山道と合流している。山頂が見いだせなかったことはこれとは関係なく実に不思議なことであった。この検証のためにいつか再びこの山に登ろうと思う。

さて下山である。1484.7m三角点を過ぎた私は快適に下って行き、その下部の尾根の分かる平たん部の中央部をそのまま下り、気が付いたらヤチマナ沢に入っていたということだろう。その沢を快調に下り阻まれたのがヤチマナ沢の滝記号だったのだろう。さらに右に小さな尾根に逃げ、それを下って再度下降を阻まれた地点が地形図ヤチマナ沢のヤの字附近で右の尾根に逃げ登山道に出会ったのが地形図の 812m近辺だったと思われる。だから地形図にない登山道があったわけではないのである。更に下って出くわしたのが白崩沢でそれに沿って左にトラバースのち朝の登路に戻れたというのが真相だったのだろうと思われる。

これはこれで面白くはあったけれど、似たようなことを続けているといつか本当の事故に出くわすことになる。気を引き締めなおそうと思う。

コースタイム：五味沢駐車場 6：15—浅草岳山頂付近 11：30～12：00—五味沢駐車場 15：